

学生相談に期待すること



今井 章子

(園田学園女子大学短期大学部 学長)

一、はじめに

大学のキャンパスの中で、学生相談室はどこにあるのかわからないという学生は少なくなってきたのではないかと思う昨今である。十八歳人口の進学率が少ない頃は、学生相談室はキャンパスの片隅にあった。そしてほとんどの学生や教職員は、そこを訪れる学生のイメージとして大学になじめず、休学、退学をしなければならぬような問題を抱えていると想像していたのではないだろうか。今や大学進学率は五〇パーセントを超え、大学のユニバーサル型化とまで言われるようになってきた。その進学率の変化と共に学生の気質も能力も多様化し、それと同時に学生相談室の大学の中の位置も変化してきている。大学自体も大学院、学部中心の大規模校、大学と短期大学が併設されているもの、そして短期大学のみのもので、又男女共学や女子大学、本学のよりに小規模の女子大学で短期大学が一つのキャンパスの中にあって運営も教育も一体化して活動し、なお学内

には若い学生のみではなくてシニアコースとして社会人のための学習の場を提供している形態をとっているものなど、学生相談室の存在意義はそれぞれの大学の規模や学部編成などによって様々である。しかし、中には多くの共通項が含まれているであろうし、現在そして将来、大学、特に短期大学の中で学生相談室がどうあるべきか、又学生を支援することの意味や援助者の問題などを考えてみたい。

二、短期大学の変遷

十八歳人口の進学率が十五パーセント未満の頃の短期大学の多くは、女性の学びの中心であった。そして当時の多くの女性が良妻賢母の生き方を理想とし、短期大学は多くの女性たちの高等教育を担っていた。それ故多くの短期大学が、文科系の学科と専業主婦として生きていくのに必要な知識を学ぶ家政系の学科が中心であった。卒業生の多くは結婚するまでの短期間、社会勉強として企業等で働くことが社会の中で是認されていた。現在のように、男女雇用機会均等法の施行から時を経て、多くの女性が専門性を持って働きたいという希望を持ち、そして多くの高校生が四年制大学への進学を希望し、企業が女性の労働力を評価したこと等、短期大学の存在の意味は急激に変化してきたのである。特に専門職業人として、又、男性と伍して働きたいという女性の増加は短期大学の教育内容を変化させざるを得なくしてきたのである。

又、少子化傾向の中で、多くの短期大学は存続をかけて受験生や社会のニーズに対応すべく改組変更を行っている。本学は伝統的な女子教育を担い栄養士、幼稚園教諭、保育士など女性の多くが独占的に働いている職種種の専門家を輩出し、それぞれの領域でかなりの実績を挙げてきた。しかし、時代の要請はより専門性の高いものとなり、本学も短期大学の一部の定員を四年制に改組し、管理栄養士養成課程としての食物栄養学科の設置や、幼児教育学科は小学校教員免許、幼稚園教諭一種、保育士資格を取得できる児童教育学科と短期大学の幼児教育学科の併設にした。そして本学は既に大学の短期大学部としてすべての教育活動、もちろん学生相談

室も一体化して運営してきている。大学の教育方法として、学生たちの細分化された知識はあるが実際の应用能力や統合する学力が乏しくなっていることを補う為に、経験値教育を標榜してきた。講義や実習、実技の中で経験値を高めるようにと授業を工夫し、大学共通科目として経験値セミナーを開講している。短期大学部でも将来実施するように現在検討をしているところである。社会の急激な変化の中で短期大学の役割は、短期間で専門的な免許や資格を取得して早く働きたいという多様な人々の教育の場となり、本学もそれに相応しい学科（生活文化学科、幼児教育学科）を設置し日々の教育に邁進している。

三、自我の脆弱な若者の増加

今日我々は日本の経済発展の恩恵を沢山享受している。そしてその発展の負の部分に誰もが気づいてきているものの、それへの適切な解決策を模索している状況である。負の遺産というべきか否か迷うところであるが、経済の急激な発展が少なからず子どもの成長発達にはあまり良い結果をもたらさなかったようである。それは学生相談室にやってくる学生、又、我々が日頃教育の中で出会う自我の脆弱で傷つきやすい若者の増加の問題である。子どもは、乳幼児期の段階で基本的安心感の保証と健全なる自己愛を育むことが必要である。そして自分の存在が他の人に脅かされる不安を排除されてこそ自己の尊厳性を確立することができ、初めて教育する段階に到達するのである。子どもの育ちは効率を追う方法では不十分であり、あれこれ脱線しながら家族や身近な人々に多様な行動や感情を受け入れてもらうことによって自己を確立し、厳しさや惨めさに耐える力を持つことができるようになるのである。しかし、科学の進歩と発展によるこの社会のスピードは、子どもの社会化に不可欠である安寧を保証する家庭、学校、地域の中さえ支配するようになってきた。子どもが泣いたり、喚いたり、愚図ったりという否定的な行動や感情に付き合う大人がいなくなってきたのである。子どもはお利口で良い子でなければ親や大人たちに認めてもらえないのである。これは決して大人が悪いわけではなく、大

人も社会のスピードに翻弄され子どもの感情に寄り添う余裕をなくしてしまった結果である。この傾向は日本だけでなく先進国における特徴と言われている。そして今まで大学への不適応状況にある学生に加えて人間関係の乏しい学生が大学へ入学するようになってきているといえる。

四、これからの相談室 ―おわりに―

いまや学生相談室は垣根の高いものではなくなり、具体的に困った状況に遭遇したときに相談室へ行くことは特別なことではなくなっている。学生相談室は、学生の問題が複雑であるものも多く学生の対応についての教職員への助言、指導も増えてきているようである。昨今あちこちの大学、短期大学で問題となっている自閉症スペクトラム障害、特にアスペルガー症候群の学生への対応もその一つである。これは大きな事件などの度に使用されているものの明確な診断基準もないままに多用されている。実際の教育現場では診断名を付けるよりその学生をどのように指導していくべきかが問題である。そして、短期大学の使命は教育することはもちろんのこと人間を育てることである。つまり自我の脆弱で未熟な学生をいかにして人格を安心、安定させ社会に貢献できる人材に育てていくことが急務である。その為には、評価するのではなく、援助される学生の感情に寄り添うことが大切であり、このことこそ学生相談の役割である。今日のように傷つき、時に間欠泉のように怒りを爆発させて多くの人々を傷つけるような人間を増やさない為にも、教員と職員が役割分担しながら学生の感情に寄り添い健全な自己愛を育てることである。そして社会の中で生きることができるような力を育むことが重要である。今後、学生相談室のスタッフは他の教職員との連携を密にしながら学生生活の援助者の中心となることが期待されると思う。